

富永神社祭礼奉納

と き 平成二十年十月十日(金)  
午後四時四十五分始  
ところ 富永神社 能楽殿

能組

仕舞

月宮殿 加藤真桜  
湯宮殿 榎本美月  
猩猩谷殿 白榎里歩

狂言

樋の酒

太郎冠者 天野遼星  
次郎冠者 加藤慧士

主人 熊谷隆  
後見 大原正巳

仕舞

女郎花 今泉尚美  
女郎花 加藤晃  
女郎花 村田昂平

狂言

狐塚

太郎冠者 天野雅夫  
次郎冠者 小澤貞博

主人 山本勝  
後見 大原正巳

仕舞

阿漕 谷野允千帆  
江口 岩崎葉子  
是界 本田洋子

(休憩 三十分)

5:30分頃

4:55分頃

7:00 分頃

半能

田村 シテ 長田共永

ワキ 太田研司

大鼓 河村 総一郎  
小鼓 森田 收

苗 今泉英三

後見 太田康弘

地謡

牧野 修 高林 伸二  
鈴木 崇史 高林 白牛 口二  
桜本 泰朗 清水 利高

7:20 分頃

狂言 千切木

太郎冠者 佐野 泰三

頭 屋 小林 常男  
酒井 淑規

客 清川 松佐  
客 加藤 賢一  
客 大原 正巳  
女 山本 勝  
後見 水谷 至男  
酒井 宏

8:00 分頃

能

杜若 シテ 杉浦史佳

ワキ 竹内声位 晤

大鼓 清水 水利 高 中嶋 康夫  
小鼓 永田 聡子 苗 今泉 英三

後見 太田康弘

地謡

牧野 修 高林 伸二  
鈴木 崇史 高林 白牛 口二  
桜本 泰朗 森田 收

附祝言

(終了予定 九時 頃)

主催 本町区

あらすじ

狂言 樋ひの酒さけ

主人は留守中に、召使いが酒を盗み飲みするので、太郎冠者に米蔵を預け、次郎冠者には酒蔵を預けて外出します。決して場所を離れぬよう留守をするようお願いかせますが、酒が飲みたい兩人は……

狂言

狐きつね 塚づか

今年は豊作で、鳥・獣が田を荒らして困るので、太郎冠者に狐塚の田へ見回りに行かせます。昼間は鳴子を鳴らして鳥を追い払いますが、夜には悪い狐が出て人を化かすという。さて心配して次郎冠者が見に行きますと……

半能

田た 村むら

東国の僧が都見物に出、弥生なかばに清水寺に着き、爛漫と咲いたそがれ時の桜花に見とれていると、箒を手にした一人の童子が現れ、木陰を清めます。そこで僧が、この寺の来歴を尋ねると、それに応じて清水寺建立の縁起を詳しく語ります。またあたりの名所を教え、ともに桜月夜の風情を楽しみます。その様子が常の人とはどうも逢うのをいぶかった僧が、童子に名を尋ねると、我が名を知りたくば帰る方を見て下さいと田村堂の内陣へと姿を消します。(中入り)

僧が夜もすがら桜の木陰で経を読んでいると、威風堂々たる武将姿の田村麻呂の霊が現れます。そして勅命を受けて、鈴鹿山の賊を討伐すべく軍を進めたが、合戦の最中に、千手観世音が出現し、その助勢によって、敵をことごとく滅ぼした有様を物語り、これも観音の仏力であると述べます。

狂言 千切木

連歌の会の頭にあたった男が、太郎冠者に仲間を呼びに行かせます。皆は男の家に集まるが、太郎だけは呼ばずに集まります。そこへ仲間はずれにされた太郎がやってきて、文句を言います。いろいろと難癖をつけるので、皆で放り出します。それを知った太郎の妻が駆けつけます……

能 杜かき 若つばた

諸国一見の僧が都から東国へと志し、旅を重ねて三河国へやって来ます。とある沢辺に杜若の花が美しく咲いているので、思わず見とれていますと一人の里女が現れ、ここは八橋という古歌にも詠まれた名所であり、昔在原業平が束下りの際ここで休み「かきつばた」の五文字を各句の頭において「からころも きつつなれにし つましあれば はるばるきぬる たびをしぞおもふ」という歌を詠んだという故事を教えてください。その上旅僧を自分の庵に案内し、泊まってゆくようにすすめます。やがて女は初冠（ういかむり）に唐衣（からころも）を着てその姿を見せにるので僧は驚いて素性を尋ねます。女は自分が杜若の精であると明かし、また業平は歌舞の菩薩の化現であるので、その詠歌の功德により非情の草木も成仏したと告げ、さらに「伊勢物語」や業平について語り、舞をまいやがて消えてゆきます。そこには紫の花のおもかげが残っているばかりでした。